

カザフスタン南部の都市サウランの最新調査と新発見

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ストリャロヴァ, ニーナ, ストリャロヴァ, ユーリヤ [訳] メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24944

カザフスタン南部の都市サウランの最新調査と新発見

ニーナ・ストリャロヴァ Nina Stolyarova
(金沢大学大学院人間社会環境研究科客員研究員・
元タシケント国立総合大学考古学教授)
ユリヤ・ストリャロヴァ Yuliya Stolyarova
(訳)

サウラン Sauran は、カザフスタンの中世都市の中で、大きさと保存のよさからみて、もっとも重要な都市の一つである。町はカザフスタン南部、シルダリヤ川の流域で、オトラルの町の西北にある (図 1)。サウランについての最初の情報は 10 世紀のものである。10 世紀の有名なアラブの地理学者アル・マクディシは「サウラン (サヴラン Savran、サブラン Sabran) は大都市で、七重の外壁に囲まれている。ラバット (農業市街) もあり、大モスク (金曜回教寺院) は内側の市内にある。サウラン市はグズ族とキプチャク族に対する辺境の砦である」と紹介している (文献 5, p. 185)。

その後、歴史学者イブン・アル・アシルと地理学者ヤクトによる簡単な情報があり、サウランは南カザフスタンにおける文化と商・手工業の大きな中心と呼ばれている (文献 5, p. 374)。

13 世紀中葉、サウランは「サヴラン」としてアルメニアのゲトゥム王の旅行記で言及された (文献 4, p. 224)。

南カザフスタンのホジャーの口承物語集である「ナサブナマ集」は、11～12 世紀ごろのものに一応考えられているが、それに基づいて 8 世紀前半のサウランの役割を考察することができる (文献 6, pp. 138-140)。サウランについて「以前はスルハン Sulkhan という名で知られ、イスラム教徒と異教徒の激戦場となっていた。戦後、新都市が建設された (おそらく以前の都市が再建されたとみられる)」と書かれている。サウランの征服によってアラブ・ムスリム軍によるカザフスタン南部の支配が完成し、ほとんどの市民がイスラム教に帰依することになった。

14 世紀第 1 四半期、金帳汗国時代のサウランはアク・オルダ (白帳汗国) の都になる。おそらくこの時代に、都市は新しい場所に移された。その移動は、モンゴル王国が崩壊してユーラシアに新たな国家が形成される際の、国家政治機構における激変と関連があると考えられる。1320 年、サウランにアク・オルダの支配者サス・ブカが埋葬された。その息子であるエルゼンはサウランとその他の南カザフスタンの町に、メドレセ (回教学校)、ハナカ (礼拝場)、モスク等を建設した (文献 9, p129)。その後長年にわたってサウランは首都の役割を果たし、様々な王朝の総督府の所在地であった。15 世紀の 80 年代に町を支配していたのはイレンチ・スルタンであり、最初のカザフ・ハンの 1 人であるジャニベクの息子である (文献 7, pp. 17-18)。

サウランの歴史における未解決の問題の一つは、町



図 1 サウランの位置



図2 サウラン 中央にカラトベ遺跡、左上にサウラン遺跡

がどこに位置していたかであった。13世紀～18世紀のサウランの所在地は間違いなくサウラン遺跡であるが、モンゴル以前の時期の町がどこにあったかは、正確には確定されていなかったのである。サウラン遺跡は18世紀まで存続したが、12世紀～13世紀以前の遺物を含む層がないのである。

最も近くのサウラン区(サウラン・小オアシス)の幾つかの遺跡を精密に調査することにより、モンゴル時代以前のサウランの位置に関するこの問題に、初めて信頼のおける解答が得られた。サウラン遺跡の近く、3キロメートル南に、カラトベという遺跡がある。そこにはたびたび研究者が訪れ、年代を紀元後の初めごろから6世紀と考えていた。

考古学調査を新しく行うことにより、カラトベの年代を1世紀から12世紀と訂正することができ、カラトベ遺跡はモンゴル時代以前のサウランであったという結論を出すことができた。

カラトベのラバド(郊外)の西部には、陶器生産の痕跡一窯跡、スラッグ、焼き損ない—が認められた。遺跡の形には中世後期(9—12世紀)の町の特徴が



図4 サウラン遺跡の塔のついた城壁



サウラン遺跡 左はメドレセ、右は金曜モスク

表れている(文献10, p. 307; 文献1, pp. 65-70)。

中世のサウランには時期の異なるカラトベ遺跡とサウラン遺跡があったことが、トルキスタン考古学調査隊(隊長スマグロフ教授)による歴史地理研究と考古学調査から明らかになった(図2)。郊外の邸宅跡、灌漑システム、墓地、郊外園芸栽培地等を伴う2遺跡が、「サウラン考古学複合体」をなしている。

過去数年間、「文化遺産」という国家計画により、近代サウランのレジスタン中央広場において、カザフスタン国立考古学研究所による大規模な調査が展開された。14世紀～18世紀の都市の外観を形成していた基本的な建築である宗教・文化建造物(ジュマ・モスク(金曜モスク)、メドレセ(回教学校)、ハナカ(礼拝場))が発掘され、市北門と附属建造物、北墓地周辺のナマズゴフ・モスク(市外モスク)、数軒の郊外邸宅跡が調査された(図3, 4, 5)。



図5 メドレセの階段と入口



図6 カラトベの発掘区



図7 住宅群間の道



図8 カラトベ遺跡上層の発掘

その後の保護のために、一番将来性のある発掘対象が選ばれた。その対象となったのは中央広場にある壮大な建築物複合体、市北門中央複合体、邸宅遺跡などである。ここでは現在、14世紀～15世紀の市内大モスク遺跡(文献11)、16世紀のメドレセ注、ナマズゴフ・



図9 スーフアに設けられたかまど



図10 かまど装飾版

モスク、1軒の郊外邸宅遺跡が完全に発掘されている。北中央市門、メドレセの反対側にある建築物、北門と中央広場を繋ぐ道の発掘は、間もなく終了となる(文献2, pp. 304-307; 文献12, pp. 96-97)。

カラトベ遺跡は国家計画の対象にならなかったため、「Olketanu」基金(代表者E. バイムルジン氏)の資金により、古代サウランを保護し現地博物館を作る目的で、大規模な考古学調査が2006年から2008年まで続けられた。

カラトベ遺跡は、入れ子状に順に納まる3部分からなり、それぞれが城壁で囲まれている。



図 11 炉



図 14 陶器とランプ



Монетный комплекс КТ-07, Р.1, 2СГ

図 12 ホレズム・シャー時代の貨幣



図 13 騎士像の刻まれた陶片



図 15 13世紀初めの施釉陶器鉢



図 16 13世紀初めの青銅容器破片



図 17 陶製祭壇



図 18 陶製祭壇のある部屋

第一城壁(外壁)は3,5km²程の面積を取り囲んでいる。曲がった輪郭をもつ城壁の長さは4km で、高い防御機能のある直角の部分を用意している。

内側の町はほとんど正方形で、長さ2,2kmの壁で守られている。正方形の中心にある楕円形の城砦は長さ1kmの城壁に囲まれている。すなわち、モンゴル時代以前では、町の規模から言えばサウランは、カザフスタン南部で最大の面積を持つ都市の一つであ



図 19 陶製祭壇のある部屋



図 20 装飾付戸口形のクリーニング

り、その主要な特徴は古代オトラールに比肩するものである。

基本的な地形的要素および建造された部分を考慮すると(同心円的な配置、考え抜かれた築城術、水の確保など)、都市計画技術の高さが窺われる。

発掘した面積は、上層で約2000m²であった。3シーズンにわたったカラトベ遺跡城砦部分の発掘の結果、上層と同時期の都市建築の一部が発掘された。城砦は様々な社会的地位の市民の住宅群から成り立っていたことが確認できた(図6)。

住宅群とはいくつかの密接した住宅であり、隣接した壁をもち、道、広場、市の境などの空間で囲まれていた建物である。住宅群の間は幅2-3mの狭い道で隔てられていた(図7)。

層位の観察によって、上層とその下の第2層のプランは、ほとんど同じであることが分かる。住宅の部屋には主な面積を占める円形スーファ(寝床)が必ず設置された。したがって、出口の前のわずかな床部分のみが空いていた(図8)。上層と第2層にある部屋の真ん中に円形の火跡があり、おそらくここ



図 21 装飾付戸口形



図22 カラトベの豊かな家から出土した陶製装飾破片

に陶製祭壇が設けられていたことを示している。12世紀～13世紀のいつの時期か、その祭壇は住居から姿を消す。入口に近いスーファには小風穴付き万能陶製かまどが設置されていた。そのかまどは部屋の中で煙道なしで使用されたようであるが、後で建てられる住宅では煙道が一般的になる（図9）。裕福な住宅では、かまどの表面は特殊なかまど装飾板で飾られていた（図10）。上層と第2層のかまどには全て、粘土が乾かないうちに内面に楡状工具でつけた模様がある。同じ模様は繰り返されない。

部屋は、壁暖炉に近い形の炉で暖められていた（図11）。壁に取り付けるものと、壁の中に設けられるものの2種類が区別される。同じ種類の暖炉は壁にあるスーファの上とスーファに近い床にも設置されていた。スーファに埋め込まれた大きな壺も部屋を温めるもう一つの手段であったらしい。それらは、割れたもの、もしくは頸部を取り去ったものであり、灰が詰まっていた。あるいはそれらの壺は、医療か陶酔を目的と



図23 壁龕の上の家の紋章



図24 祭壇のある自宅用礼拝所 カラトベ第3層

して、何らかの薬草を燃やす香炉として使われたのかもしれない。

住宅のもう一つの興味ある点は、深い穴の付いた独立した小部屋があったことである。時折部屋の床は石もしくは焼煉瓦で舗装されていた。この部屋は衛生部屋かトイレとして使われていたようである。

裕福な住宅には倉庫として使われていた独立部屋が必ずあり、それは穀物を置いた倉庫であった。裕福ではない住宅では、穀物置場は部屋のスーファの上であった。

このように、カラトベの城砦部分の発掘は、中世の町の文化の歴史を観察するためのユニークな資料を提供したと言える。第2層から出土したホレズム・シャー時代の貨幣により、第2層が12世紀のものであることが確認された。従って上層は13世紀前半と考えられる（図12, 13, 14, 15, 16）。

第3層には台形、長方形、正方形などの様々な形の部屋がある。壁の方向や住宅の多目的部屋の位置について、上層と第2層のあいだに見られたような継続性が、第2層と第3層のあいだには見られない。



図25 長靴形護符



図26 陶器に刻まれた突厥ルーン文字

スーファと、部屋の中央に設置された陶器もしくは土製の祭壇は、住宅の部屋には必ず設けられるものであった(図17, 18, 19)。

部屋の壁に粘土ひもを貼り付けて、戸口形を作った独特の構造は、非常に興味深い。長方形の彫刻フリーズを支える3/4の2本柱が、部屋の東南角に近く配置されている(図20, 21)。

多様な建築方法と部屋の装飾方法が注目される。ここでも未乾燥の粘土の上にモルタルの壁画(図22)があり、アラバスターを貼り付け、壁と建築部に赤色を塗り、粘土ひもを貼り付け、壁龕(図23)やフリーズは未乾燥の粘土を彫刻している。

発掘の結果、2軒の正方形と1軒の方形の独立した住宅が発掘された。全ての住宅には3面壁付きのスーファが配置されていた(図24)。部屋の入口は横にあり、内側の空間からついたて壁で分離されていて、ペンジケント遺跡と類似している。ペンジケント遺跡の住宅は横のタンブール通路で自宅礼拝室と



図27 10世紀の施釉陶器



図28 魚形と渦巻きロゼット文様

繋がり、礼拝室には壁付き祭壇が配置されていた。

発掘で出土した面白い発見を紹介したい。まず、第2層出土の、陶器で作られた長靴形のお守りである。(図25)

次は陶器に刻まれたきわめて珍しい銘文である(図26)。カラトベで2008年に発見された陶器片に刻まれた銘文の考察は、I. クィズラソフ博士によって行われた。

カラトベ遺跡における新発見は、シルダリヤ川流域およびその付近の、初期中世における突厥ルーン文字の、今まで4例しか知られていない希少な例である。破片に刻まれていたルーン文字により、アチクタシ・アルファベットの独自な性格が裏づけられ、新発見の記号が付け加えられた。3点形の分離文字(今までは縦に配置された2点形のみ知られていた)と多数複線付き弧形記号が新たに発見されたのである。

簡単な銘文の発見によって、今やアチクタシ・アルファベットに属する27の突厥ルーン文字が知られることになった。今回サウランにおいて幸運にも発見されたアチクタシ・ルーン文字体系が、ユーラシア・グループと呼ばれる西派ルーン文字体系に属していることが非常に重要である。それはオルホン・アルファベットやエニセイ・アルファベットとは異なる全く独立した起源を持っているのである。

カラトベ遺跡の第3層で発見された陶器類は非常に品質がよい。明るい背景の上に黒と赤の2色で彩色を施している(図27)。装飾のモチーフはさまざまであるが、植物と銘文モチーフが一番多くみられる。銘文モチーフとは、器の口縁の鋸歯文帯の下に、銘文を水平に配置したものである。小さな魚を並べた円のなか

に渦巻きロゼットを配する地方的な文様も発見された(図 28)。この陶器類の形態の基本的な特徴に注目しなければならない。最も多い形は半球形と円錐形の碗で、円盤形あるいは幾分へこんだ輪形の高台をもつ。釉の掛かっていない容器には、角形の貼り付け把手をもつ壺がある。この陶器の種類は 10 世紀後半～11 世紀初めのソグドとチャチの陶器の代表である。

発掘によって、様々な手工業品が大量に出土した。それには現地で作られたもののほかに、明らかに輸入されたものがある。マーワルアンナフル、ホラサン、西アジアの手工業中心地から大シルクロードのキャラバン・ルートを経て齎されたもので、発達した大都会の住民の文化や日常生活を示している。

以上のことをまとめると、サウランは、複雑で、また珍しく保存のよい多様な考古学遺跡であり、草原と中央アジア・オアシスの境界にあった古代・中世の都市の特色をあらゆる面で示している。カザフスタン政府は「サウラン考古学複合体」において、国家博物館地域を設立するための活動を行っている。考古学調査を行うのはトルキスタン考古学発掘調査隊であり、それは共通の目的を達成する協力のために設立された。

注. まさにこのメドレセが、16 世紀の著述家であるヴァシフによって記述されたものであり、その珍しい揺れるミナレットは、19 世紀末以前に破壊されたことが明らかになった。この珍しい構造をもつ建物には、以前 A. プガチェンコヴァが注目している(文献 8, p. 163; 文献 3)。

参考文献

1. Байпаков К.М. Средневековые города Казахстана на Великом Шелковом пути. Алматы, 1998.
2. Байпаков К., Смагулов Е.А., Ержигитова А., Туякбаев М. и др.// Исследования городищ средневекового Саурана // Мемлекеттік «Мәдени мұра» бағдарламасы бойынша 2005 жылғы Археологиялы зерттеулер жайлы есеп. Алматы, 2005.
3. Байпаков К.М., Акылбек С. Ш. Медресе средневекового Саурана//Средневековая археология Евразии. Алматы-Кемерово, 2008.
4. Ганзакеци Киракос. История Армении. Перевод с древнеармянского, предисловие и комментарии Л.А.

Ханларян. М., 1976.

5. Материалы по истории туркмен и Туркмении (МИТТ). Т. 1. М., 1939.
6. Муминов А.К. Кокандская версия исламизации Туркестана//Подвижники ислама. Культ святых и суфизм в Средней Азии и на Кавказе. М.2003.
7. Пищулина К.А. Присырдарьинские города и их значение в истории казахских ханств. -В кн.: Казахстан в XV-XVII вв. Алма-Ата, 1969.
8. Пугаченкова Г.А. Сауранские башни// Труды САГУ, вып. LVII, 1954.
9. Сборник материалов, относящихся к истории Золотой Орды (СМИЗО). Т. 2. М.-Л., 1941.
10. Свод памятников истории и культуры Казахстана. Южно-Казахстанская область;
11. Смагулов Е.А. Сауранская мечеть..., в печати.
12. Смагулов Е.А. Архитектура Саурана// Промышленность Казахстана, 1, 2006.
13. Фазлаллах ибн Рузбихан Исфгани. Михманнаме-йи Бухара (записки бухарского гостя). Перевод, предисл. и примеч. Р.П. Джалиловой. М., 1976.